

であるとすれば、この「復」の文字も、この文の中で意味をもったものとして生きてくる。したがって、このような理由からも、先の不可解な文章は、後の問と接続して読むべきである。

さて、以上のように、先の不可解な文章と後の問とを接続して読むならば、前にあげた道忠の『釈浄土群疑論探要記』の解釈も、望月信亨博士の説も神子上恵龍博士の説も、その論拠を失うこととなる。つまり、凡夫所変の浄土は三界撰であるとするのが正しいという説は、懐感の説ではなく、懐感に対して問を起こした者の説であるということになる。これは、この問に対する懐感の釈を読むことによって理解される。すなわち『釈浄土群疑論』巻第一によると、

「釈曰。此何所<sub>レ</sub>惑更<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>斯問<sub>レ</sub>。浄土器世間<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>漏<sub>レ</sub>識心所変<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>三界<sub>レ</sub>。即有<sub>レ</sub>漏<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>寛<sub>レ</sub>三界<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>局<sub>レ</sub>。浄土凡夫<sub>レ</sub>但名<sub>レ</sub>化生有情<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>人天<sub>レ</sub>二趣<sub>レ</sub>。此即四生義<sub>レ</sub>寛<sub>レ</sub>五趣義<sub>レ</sub>局<sub>レ</sub>。今此亦爾<sub>レ</sub>。雖<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>凡夫有<sub>レ</sub>漏<sub>レ</sub>之身<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>三界<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>也。」

と説かれる。すなわち、何の惑があつてか、何度もこんな問をするのか、凡夫が往生すべき器世間としての浄土は、たとい有漏の識心の所変であるとしても三界というとはできない、なぜなら有漏の意味は寛く三界の意味は狭い。また浄土へ往生した凡夫はただ化生の有情であるから人、天二趣ということとはできない。これは四生の意味は寛く五趣の意味は狭いからである。今の問もまたこの理論により明白である。したがって、たとい凡夫の有漏の身であるといつても三界の身であるといふことはできない。と懐感も積しているのである。もし懐感が本当に三界撰の説を正しいといっているのであれば、この釈を試みた理由、意義はあり得ない。また、この文の中に出る「浄土凡夫、但名<sub>レ</sub>化生有情、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>人天二趣」という一句は、先にあげた不可解な文章に対する釈として充分に説得力を持つものである。よって、この釈からも、前の不可解な文章を後の問の文章に接続して読むことが、この文を読解するのに不可欠なこととすることができよう。

以上のような理由によつて、従来の『釈浄土群疑論』理解の中で、「懐感凡夫所變の土を三界撰とするのを正しいとしていた」とする、道忠、望月信亨博士、神子上恵龍博士等の説について疑問をいだかざるを得ない。これについてはすでに金子寛哉先生も述べておられるが、今回私は、従来と異なる文章解釈によつて明白な論拠をあげ、その証明をなしたものである。私の試論であるゆえに、諸先生からの御指導を乞うものである。

註① 望月信亨著『中国浄土教理史』二二三頁。

② 神子上恵龍著『弥陀身土思想の展開』三四九頁。

③ 『浄土宗全書』六卷一〇頁b)一頁a)。

- ④ 同右、六卷八頁b)。
- ⑤ 同右、六卷九頁a)。
- ⑥ 同右、六卷一七九頁b)一八〇頁a)。
- ⑦ 岸寛勇著『統善導教学の研究』一八八頁。
- ⑧ 服部英淳稿「禪淨融合思想に於ける浄土の解明」(『仏教大学研究紀要』五〇号八七頁)。
- ⑨ 金子寛哉稿「懐感禪師に於ける浄土の三界撰不撰論」(『仏教論叢』一三三号六四頁)。
- ⑩ 『釈浄土群疑論口義』三十七丁左。
- ⑪ 「斯亦乘阿弥陀仏不可思議弘誓願力、令其業力感報極長、非是凡夫所測度。経文顯然。不可不信。大乘道理意趣難知。諸仏境界非凡所測。但知仰信專誠修学。不可不一依諸法相。楷定是非。論是三界非上三界也。」『浄土宗全書』六卷一頁b)一頁a)の文を指す。
- ⑫ 同右、六卷一頁a)。
- ⑬ 『大正藏経』一二卷二一九頁c)二二〇頁a)類似の文章あり。
- ⑭ 同右、二四卷一〇一八頁a)一〇一九頁a)類似の文章あり。
- ⑮ ここで懐感が相手としている「問」の意見をもつ者は、慈恩と考えられ、その主張は、『大乘法苑義林章』巻第七仏土章の中にあらわれている。『浄土宗全書』六卷九頁a) b)。
- ⑯ 『浄土宗全書』六卷一頁a)。

## 廬山の慧遠と東林寺

稲岡誓純

一、

中国仏教史上、廬山の慧遠の業績は、大別すると二点に別けることができる。まず第一点は、社会的には中国固有の礼と仏教との対立の問題、思想的には格義仏教からの離脱の問題、教理的には神滅・不滅と般若・空との止揚の問題義について、中国仏教史上初期の時代にありながら、彼ながらに解決したことである。これらは、中国人による中国人の仏教を作りあげる上で、最も重要な淵源となったことであり、それは

また、中国において仏教が受容される上においてどうしても直面しなければならぬ中国伝統の思想・習俗との交渉による問題でもある。こうした問題に対して、慧遠は毅然として、仏教徒のとるべき態度を明確にし、後の中国仏教のありかたを方向づけをしたのである。第二点は、廬山に一寺を建立し、念仏の衆徒を集めて結社し、それを白蓮社と称して念仏の宣揚に努めたこと、すなわち中国浄土教の始祖と仰がれることである。

## 二、

廬山の慧遠の伝記を大きく別けると、三期間に別けることができる。第一期は慧遠が出家する以前の中国古典の学習期である。この時期はとくに道家思想を学んだ時期であり、このことは、後の彼の仏教思想の受容に大きな影響を与えることになるのである。第二期は道安門下として、般若学と禅観・儀軌を学んだ期間であり、慧遠が廬山に向かった時期(三三七年)までの二十五年間ということができる。第三期は廬山より一步も出ずに、没するまでの三十数年間である。この期間は、羅什仏教を受容したり、三世応報と神滅不滅等の教えを士大夫に説いたり、白蓮社という念仏結社を作り、戒律を守りつつ般若と禅観とを併修した期間である。

さすれば、慧遠の一生を見ていくにあたって、廬山の東林寺はいかに重要であることがわかるのである。よって本稿では、慧遠と東林寺についてすこしくのべ、現在の東林寺の様子をも述べることにする。

## 三、

慧遠は三三四年山西省雁門の樓煩県の生まれで、二十一歳(三五四年)弟の慧特と共に道安について出家した。そして、三七八年秦王苻堅は苻丕を総指揮官として襄陽を攻撃させ、翌年襄陽は陥落した。そのあおりをうけ道安は、長安へ連れて行かれた。慧遠は弟の慧特及び弟子数十人と共に南下し、三七八年荊州の上明寺に住んだ。そしてさらに南の羅浮山(広東省博羅県西北五十里)へ向い、三八一年潯陽の竜泉精舎に住し、その後道安門下の慧永(三三三〜四一四)の廬山の西林寺に迎えられたのである。

この西林寺は『高僧伝』巻第六の慧永伝、歐陽詢の『廬山西林道場碑』によると、晋の光祿卿・潯陽の陶範が大和二年(三六七)に建てた寺である。

ところで、慧遠が潯陽に來た年時について、宋の陳舜俞の『廬山記』巻第三に所引された『十八高賢伝』では、<sup>②</sup>太元六年(三八一)となっており、東林寺に住した時期は、『仏祖統紀』巻第二十六所引の『廬山遠法師影堂碑』では、<sup>③</sup>太元九年(三八四)

となっているのである。この兩者より、三八一年四十八歳に潯陽の竜泉精舎に來て、そして三八四年五十一歳に廬山の東林寺に住したことになるのである。

『高僧伝』巻第六の慧永伝に

积慧永姓潘、河内人也。年十二出家。伏事沙門竺曇現為師。後又伏膺道安法師。素与遠共期欲結宇羅浮之岫。遠既為道安所留。永乃欲先踰五嶺行經潯陽。郡人陶範苦相要留。於是且停廬山之西林寺。既門徒稍盛。<sup>④</sup>

とあるように、慧永は慧遠より先に西林寺に住していたのである。当時の支配者である陶範が西林寺を建立したことは、既に述べたように、『廬山記』巻第一所収の隋の太常博士の歐陽詢の撰した『廬山西林道場碑』によると、潯陽の陶範が秦の太和二年(三六七)に伽藍を創建して西林寺と名づけたという。そこに曇現を初めに住まわせたが、慧永はこの曇現について十二歳で出家し仕えたのであって、陶範が慧永に西林寺に留まることを勧めたことは当然のことと思われる。

羅浮山へ行くつもりであった慧遠も、西林寺の慧永の懇請によって止まり、慧永は江州の勅吏桓伊に、

遠公、方当弘道。今徒属已広、而來者方多。貧道所棲福狭不足相處。如何。<sup>⑤</sup>

といい、この慧永の要請に答えて勅吏の桓伊は、

桓乃為遠復於山東更龍房殿。即東林是也。<sup>⑥</sup>

と東林寺は西林寺に近い所に新築したことを伝えているのである。桓伊の江州の勅吏の在任期間は、太元九年(三八四)から十七年(三九二)であるから、東林寺の建立はこの期間であると思われる。なお、この東林寺の建立年時については、『東林十八高賢伝』の慧永伝では、太元十一年(三八六)と伝えており、同様に『仏祖統紀』巻第二十六も太元十一年としているのである。

この後、慧遠は山を出ざること三十有余年間、廬山の東林寺に於いて修道生活が始まるのである。『高僧伝』の慧遠伝によると、

清泉環階白雲満室。復於寺内別置禅林。森樹烟凝石筵苔合。凡在瞻履皆神清而氣肅焉。<sup>⑦</sup>

と伝えられるように、静寂な禅観道場であったのである。

## 四、

東林寺の現況について、昭和五十九年二月二十四日・二十五日の両日にわたり、第四回大正大学・佛教学祖跡研修団の一員として現地を訪れたので、それを付加することにする。

東林寺の山門の入り口には、江西省人民委員会が一九五七年七月一日に重点文物に

指定した「廬山東林寺」の偏額が掲げられており、山門の壁面には、右より「南無阿弥陀仏」と書かれ、山門を潜ると黄色の門があり「浄土」と書かれ、その両側には数多くの巨大な礎石が放置されていた。そして正面に神運宝殿があり、表に釈迦三尊、裏に観世音菩薩がまつられている。普通、中国の仏教寺院の大雄宝殿に相当するものが、この神運宝殿である。

この神運宝殿の右側に三笑堂と念仏堂があり、三笑堂とは三賢堂とも言われ、その三笑とは「虎溪三笑」の伝説で有名であり、慧遠像がまつられている。また念仏堂には「十八高賢影堂」ともいわれ、かつて白蓮社に参加した十八賢人の浮彫像の修復されたものが堂内にかざられており、本尊は、弥陀三尊である。念仏堂の前には六朝松があり、逆に後には文殊閣があり、その裏山には訳経台が建っている。

東林寺の西方には、仏駄跋陀羅尊者の塔院があり、さらにその西方に「下方塔院」・「遠公塔院」と呼ばれる慧遠の墓塔がみられる。この墓塔は新しく改修され、塀で囲まれた建物のなかに在った。ただ大正九年に常盤大定博士の発見された墓塔とは形のみ面影が残されているが、セメントを使って相当に改修している。常盤大定博士は、『支那仏教史蹟解説』の第十に、

石室の中に高さ約九尺、広さ約十一尺の墓塔がある。八角形の台の上に、石を集めて塔身をつくり、全体の格好、覆鉢形の印式塔をなしている。

と報告され、鎌田茂雄博士は一九八〇年六月に行かれた報告として『中国仏教の寺と歴史』に、

石室はなく、やや低くなった墓塔のみが、丘の上の草叢の中に、寂然として安置されているにすぎない。と、いつておられる。

慧遠の墓塔より、道路を隔てた畑の中に古塔があり、これは唐の開元年間建てられた塔で、西林寺の千仏塔といわれている。現在のものは明代に重修されたもので六角七層の塔である。各層には仏龕がはめられ、第一層には「千仏塔」、第二層には「羽宝才」、第三層には「金剛」、第四層には「靈鷲來」、第五層には「天上清」、第六層には「聴雨苑」、第七層には「元明蔵」とある。塔のすぐ近くに西林寺と額の掲げた小さな建物もある。以上現在の東林寺の様子を述べたが、訪れたときも修復中であり、今後ますます整備されていくことは間違いないと思われる。

註① 廬山の慧遠の伝記は、『高僧伝』巻第六・『出三蔵記集』巻第十五・謝靈運の『廬山法師誅並序』のほか浄土往生伝類にも収録されている。なお、木村英一編『慧遠研究』は、廬山の慧遠についての総合的な研究書である。

② 『十八高賢伝』（『廬山記』巻第三所引）には後随師南遊師襄陽。安爲朱序

所拘。衆皆罷去。遠乃與弟子數十人適荊州。住上明寺。後欲往羅浮山。太元六年。至潯陽。愛廬阜之間曠。乃立龍泉精舍。（大正五十一・一〇三九上）とある。

③ 『廬山遠法師影堂碑』（『仏祖統紀』巻第二十六所引）には、自晋氏太元九年、法師始飛錫南嶺宅勝東林。（大正四十九・二七〇下）とある。

④ 『高僧伝』巻第六慧永伝（大正五十・三六二上）。

⑤・⑥・⑦ 『高僧伝』巻第六慧遠伝（大正五十・三五七中）。

⑧ 伝説に、東林寺の建立の時、木材が無かったが廬山の山神が楠・梓など限りなく湧き出てくる池を教え木材を提供して、それを運んで建てられた殿であるため神運宝殿と称したという。

⑨ 昭和六十一年二月二十日に第六回大正大学・佛教学祖跡研修団で再びこの地を訪れると、山門と神運宝殿の間に大規模な天王殿を建設中であった。